

第52回日本のうたごえ全国協議会総会

方針

はじめに

「70周年記念日本のうたごえ祭典 いのちをうたおう！ ころろをつなごう！」が去る1月、東京を主に、3日間にのべ2万人が集い開かれた。メイン企画の2つのフェスタは、座席がステージで四方から歌い交わす趣向で、国内外のゲストとともに多彩な音楽はじめ、生きる力を歌でつなぎ感動を共有しあう音楽会となった。祭典は他に、「うたごえ運動70年の歩みと未来へつながる音楽会」（小村公次評）となった「記念音楽会」、「全国和太鼓と民謡・民舞まつり」、6部門の合唱発表会と創作曲発表の「オリジナルコンサート」も開催し、それぞれ大成功をおさめることができた。また、関連企画として日韓交流20周年記念コンサート（都内）も開催された。

2020年の東京オリンピックに向けて、東京圏各地の大型会場（アリーナ級）や劇場、コンサートホールが改修工事などで使えなくなる、いわゆる「2016年問題」の影響で祭典メイン会場が確保できたのが一昨年の暮れ。実質1年余りの準備期間で3日間の祭典を成功へと導いた東京のうたごえ並びに全国のうたごえの大きな努力と連帯で、70周年記念事業の集大成にふさわしい輝く歴史の1頁となる祭典を創りあげることができた。5年後の75周年に向けた2023年ヴィジョンにむけて創造・組織両面において力強く前進していきたい。

うたごえ70周年記念事業として、①日本のうたごえ祭典、②6人の

音楽家によるニューアレンジ合唱曲集「みんなのうた」の出版、③6人の音楽家によるシンポジウム、④「原発」「戦争法」「沖縄」をテーマにした記念作品の公募、⑤記念作品と位置づけた混声合唱組曲「こわしてはいけない」無言館をうたう（窪島誠一郎作詩・池辺晋一郎作曲）の上演普及、⑥シンボルマークの制作、⑦記念レセプション、⑧「うたごえは生きる力」出版、⑨「うたごえ新聞万灯祭」提灯広告、以上9つのプロジェクトが取り組まれた。後に記念事業に位置づけた「創刊60周年記念うたごえ新聞まつり」全12カ所（特別開催の沖縄除く）での池辺晋一郎氏とゲストによる対談集「池辺晋一郎の夢を見てますか」文化は歴史と人を創る」（仮称／発行 70周年記念事業委員会・うたごえ新聞社）も今総会時に出版された。

これら一連の記念事業を全国のうたごえの仲間をはじめ多くの支援者の力により成功裡に完遂することができた。

今総会以降は、さらに過去の歴史・教訓に学び、75周年をめざす総合的な発展基本計画（運動指標等）「うたごえ2023ビジョン」に謳われている10のビジョン（別項）を柱にした活動を全国的に展開し、運動の一層の発展をめざしたい。

75周年に向かう運動にとって国民の生活と闘いを創造の源泉とした演奏・音楽創造をどう豊かに発展させていくか。うたごえ運動における、組織建設、「うたごえ新聞」読者の飛躍的拡大、運動の理念を引き継いでいく次代の担い手づくりなど、運動発展の根幹をなす課題といえる。

2018年度 活動のまとめ

70周年記念事業

「うたごえ2023ビジョン」を柱に、70周年記念事業を取り組んだ。メインとなる70周年祭典を、新しい形で、70年の運動の蓄積を生かして成功させた。

70周年普及曲として位置付けた「こわしてはいけない」を70周年祭典はじめ各地で演奏。ニュースも発行して普及した。70周年公募創作曲から「約束のうた」が祭典のファイナルで演奏された。

記念出版の「みんなのうた」、5月に急逝された高橋正志元会長執筆によるうたごえの歴史を綴った「うたごえは生きる力 いのち 平和 たたかい うたごえ70年の歩み」を引き続き普及、うたごえ新聞60周年記念全国うたごえまつりのトークを集めた「池辺晋一郎の夢を見てますか」を、本総会にあわせて出版した。

1 うたごえを創り広げる活動

①「憲法改悪」に反対し、戦争法廃止、辺野古新基地建設阻止、原発ゼロ、核兵器、安倍暴走政権ノーのうたごえ

ヒバクシャ国際署名を引き続き会員数の5倍を集める目標で取り組んだ。「一人から一人へ」を歌いながら運動をけん引した長崎など、今年も各地で平和団体との共同で1万筆を超え、2年間の共同行動を含めて37545筆(2月27日現在)が集まったが目標の数には届いていない。未集約もあるが、全国的な取り組みになりきらなかったことが要因といえる。

秋の沖縄知事選挙をにらんで9月に地元での「こわしてはいけない」公演とあわせて第四次沖縄行動を取り組んだ。翁長知事の急逝により繰上となった知事選挙には、全国協議会事務局次長を急遽派遣し、最終盤の支援活動を行った。大阪の「ちばりよく沖縄合唱団」は、2月の県民投票に現地に足を運んで支援にあたった。全国のサークル・合唱団も沖縄に足を運んだ。祭典時には、稲嶺進元名護市長の訴えもあり、うたごえ沖縄基金に多くの寄付が寄せられた。

憲法集会や19行動、毎年新春行動に取り組む大阪など、各地で改憲NO!のうたごえを取り組んだ。憲法を歌った「こわしてはいけない」

は、祭典記念音楽会での全曲演奏、フェスタでも抜粋で演奏されたのはじめ各地で演奏された。安倍改憲NO!3000万署名の取り組みは、毎月行動で1000筆をこえる実筆署名を集めた長崎など、全国で20021筆(2月27日現在)となった。

東日本大震災の被災地支援では、レガテ(大阪)の呼びかけによるチャリティコンサート開催、合唱団白樺の現地での交流・演奏など継続して全国で取り組まれた。祭典では「原発ゼロの未来を 福島を忘れない」ステージが福島のうたごえ中心に全国の原発立地県も加わって17都道府県が参加。ここで歌われた「子どもの大空」はその後、青森、静岡などでの集会での演奏につながった。

②「いつでも、どこでも、うたごえを」を合言葉に、歌う喜びをひろげる活動

70周年祭典では、大うたごえは会場にあふれた人が、京都のうたごえと共に、屋外でも歌い交わした。京都では、2019祭典に向けて1万人のうたごえ大作戦を展開し、祭典賛同のうたごえを広げながらカウントしている。

3・1ビギニデー、3・8国際女性デー、メーデー、憲法集会、母親大会、原水爆禁止国民平和大行進と世界大会など、各種の運動の中でうたごえを響かせた。東京、広島ではスクラムコンサートが取り組まれ、祭典へとつないだ。夏の全国保育団体合同研究会で公式プログラムとしてうたごえ交流会が持たれ、1500人が参加した。「こわしてはいけない」も東京・新宿「平和のための戦争展」プレ企画での演奏など新しい広がりを作った。毎年続く埼玉の戦争展など各地の戦争展でも、うたごえを届けた。東京では基地反対の集会や行動などで「帰れ帰れ」を歌い広め、祭典につないだ。

③多くの人が「こぞって歌える」愛唱歌を創り出す

2018年も、国民的なたたかひの中で、喜び・悲しみ・怒りなど人々の心に寄り添い、心つながり歌づくりが各地で行われた。合唱団として専門家との共同で生み出すものから、運動内の創作活動家やサークルでの創作まで、形態も合唱組曲からソングまで、たたかひの現場で、スト

リートで、各地の演奏会・祭典などで多彩に繰り広げられ、それらは70周年祭典で、また、うたごえ新聞紙上で発表・交流された。

「創作の敷居を下げ、都市部で1泊2日の日程で行う」方針のもと、3年目の開催となった神奈川での創作講習会は、例会を中止して取り組んだ神奈川合唱団を中心に37人が参加。持ち寄り詞・詩・曲67編、講習会中に26曲が生まれた。「来年、県の創作講習会をやりたいという意欲が沸いて来ました」「作詞の講師やチューターがほしい」という感想のように、講習会開催がきっかけとなって新しい広がりをつくった。

北海道は、創作合宿から「大間原発 大間違い」などが生まれ、集会で歌われた。大阪は創作センターで毎月会議を行い、創作合宿で生まれた大阪ソング「みんなの大阪」などを歌い広めている。北九州創作会議もまたづくりを継続。

祭典オリジナルコンサートは、遠方会場のため参加を断念したサークルもあったが、「各地の創作講習会の成功とあいまって37曲が演奏された。憲法、沖縄など国民的課題や身近な暮らしの中に見過ごせない問題を取りあげる積極性、良い着眼を持ちながら未消化な部分を残すもの」（総評）など成果と課題が出された。発表作品やその講評集はHPなどでも掲載。大切な学びのツールとしたい。

創作曲はオリジナルだけでなく、合唱発表会や音楽会などでも発表され、その把握には工夫も必要。できた作品をどう広げていくかは、ベスト作品CD発行の発想も検討されている。大阪、愛知、東京などは県で創作発表会を行っているが、創作のすそ野を広げるためには、全国講習会だけでなく、ブロックや県・産別・サークルなどできめ細かく講習会や創作の取り組みを実施していくことも大切。

2 合唱発表会運動、地域・分野のうたごえ祭典

①県、産別、全国の合唱発表会の取り組み

31都道府県、1ブロック、7産別、1階層で合唱発表会が行われ、1537団体が参加。祭典開催地東京で参加団体の広がりをつくった。新潟は2年続けて祭典として開催して参加を広げた。

全国の発表会には、290団体が参加。小編成の部の推薦基準を合唱と同様にした結果33団体に納まった。一昨年の一般の部A、Bの人数区分の変更は、運営上のバランスのよさとなったが、A部門での音楽的課題も浮き彫りにした。出演団体から要員を出すことの徹底や、開催地からの要員協力、マニュアル化などで、運営上の改善が見られた。6部門、並行開催が定着する中、掛け持ち出演者の対応などの課題とともに、聞き合い、学び合うという合唱発表会の原点を問う検討が、小委員会などで進んだ。

②地方祭典、産別祭典など

県祭典は、北海道、山形、長野、新潟、広島、長崎、佐賀の7県、ブロック祭典は九州ブロック、産別祭典・交流会は、教育、私鉄、国鉄、電通、医療、保育、自治体の7産別、階層では青年が開催。教育は、2020年の祭典開催を見通して被爆地長崎で交流会を開催。国鉄と北海道祭典は函館で合同で開催した。青森で開催の東北交流会は北海道からの参加も。

③70周年祭典の取り組み

70周年祭典は、記念音楽会2000人、2つのフェスタにのべ10000人、全国和太鼓と民謡・民舞まつり11000人、合唱発表会・オリジナルコンサートにのべ55000人、大うたう会、ピースライブなど、あわせて2万人の参加で成功した。

Women of the World、東京少年少女合唱隊、井上鑑さんの〈連歌「鳥の歌」プロジェクトなど豪華ゲストの演奏で魅了した記念音楽会では「こわしてはいけない」の全曲演奏も。

客席を歌い手席にしての2つのフェスタは、移動がないことで、ゆっくり歌え、また、落ちついて聴けた。全国合同では「こわしてはいけない」（抜粋）を演奏。「基地いらない！」のステージは、現地で闘ってい

る人たちにも広げた。また、会場のある神奈川の連帯が支えた。

④2019年以後の日本のうたごえ祭典の取り組み

2019年の京都祭典は、4月に会場が決まり、9月には地元実行委員会が発足。年末までには選曲案も決定するなど、70周年祭典と並行して準備が進められてきた。2020年は、被爆75年の広島での開催が決まり準備が始まっている。2021年以後については、開催候補地について祭典プロジェクトで検討が進められている。

3 うたごえ新聞・季刊「日本のうたごえ」

「うたごえ発ジャーナル」としてうたごえ新聞をいっそう輝かせ読者を広げる

①創造・組織・普及の力にし、読み・つくり・広げる活動

運動方針「歌う日本国憲法請負人」―9条改憲を許さないを軸に4つの止（戦争法廃止、辺野古新基地建設阻止、原発停止、核兵器禁止）の活動を70周年記念祭典へ―を進める力に、編集部と全国の活動通信で編集した。

「4つの止」の活動では、〈改憲NO!〉〈原発ゼロ 3・11〉の通信特集、また、独自コンサートや音楽づくりが活発に通信された。通信数（昨年1月から今年2月）1249通（ニュース含）は前年度（1年）1063通（同）に比べ大きく上回り特に通信数180通増が豊かな紙面を作った。

提言・インタビュー取材、〈憲法〉では弁護士・伊藤真氏の「生かそう日本国憲法の真価」を70周年記念ロングインタビュー8回連載は、日本国憲法が世界的視野から伝えられた。〈辺野古新基地建設阻止〉、松元剛氏（琉球新報読者事業部特任局長）、〈原発〉「フクシマ」を語る写真家豊田直己氏と作家徐京植氏の対談。朗読劇「線量計が鳴る」公演の作家・ジャーナリスト中村敦夫氏。〈核兵器禁止〉では広島の被爆者・東友会副会長山田玲子さん、医師・ヒバクシャ国際署名をすすめる長崎県民

の会共同代表朝長万左男氏、俳優・吉永小百合さんなど。

また、歌手加藤登紀子さん「歌は歌い継いで命の根を張る」。作曲家信長貴富氏「時代の焦眉へ心揺さぶる発信」。作編曲家井上鑑氏の「音楽でつながる平和への希求」等創造の深い示唆を得た。

70周年記念祭典づくりでは開催地東京の運動と連携して企画。〈基地・沖縄〉のステージで横田基地撤去の運動と結んで歌を広げた三多摩のうたごえ。〈障害者とその仲間たち〉ステージの都障組の山口直さん。「障害者を閉め出す社会は弱くもろい」と語る日本障害者協議会代表の藤井克徳さん（季刊『日本のうたごえ』の全文収録は大きな反響を呼んだ）。築地移転反対は食の安全・消費者の権利を守る闘い（『私は築地の女将です』。〈スクラム〉ステージにつなげたプレ企画スクラムコンサートと交通労働者の「安全輸送は今」座談会。また、「働き方改革」法についてのうたごえ運動に携わる岡田尚弁護士の「働き生きることと文化」はあらためて職場の文化活動の意義が語られた。

詞を深める70周年記念企画「ことばを磨く」新企画「川柳の本領」（上方芸能評論家・木津川計）は好評を博し、続「笑いの力」「笑いの灯」として継続。

読者拡大では、30都道府県で1220人の新読者を迎えた（2月20日現在）。拡大運動を活発にするために6月に組織活動者会議を開催した。経験交流と討論の中で組織建設の幹は加盟拡大にあり、と、総合的な組織建設の中での読者拡大の方向性を見た。さらに、8月全国支局会議では読者拡大に特化した意思統一を行い、祭典開催地東京の奮闘が全国をけん引した。うたごえフォーラムを開催した長崎が東京と共に年間指標を達成した。

②規模を問わず「うたごえフォーラム」の全国展開

編集部とのうたごえフォーラムは今年度、佐賀、長崎、兵庫、大阪で開催。紙面づくり、感想・要望等を交流したことでそれぞれ新読者を迎えた。

③通信を活発に全国の活動を学びあう

①で触れたように今年度通信活動は活発に行われた。広島を訪れ、「被

爆・平和」とはをつかんだ通信の関西合唱団青年部。協議会で活発な通信・大阪のうたごえ。大間原発反対運動と歌づくりを函館トロイカ合唱団・茂木正樹さん、オスプレイ反対千葉県民集会はじめ県の活動を合唱団プリマベラ・埴治子さん、精力的な創作・演奏を送稿、愛知子どもの幸せと平和を願う合唱団、藤村記一郎さん。奈良蟻の合唱団ベトナム公演、広島のうたごえ、サム・トゥッ・ソリ公演、東京紫金草合唱団の華僑合唱団交流は国際交流を豊かに伝えた。

④季刊「日本のうたごえ」は、運動のテキストとして会員構成員購読をめざす

2018年度はNo.179、182を発行。メイン企画は、No.179、70周年記念事業の一つ「6人の音楽家によるニューアレンジ合唱曲集『みんなのうた』出版記念座談会での音楽家のアプローチは音楽づくりの大きな力となった。

No.180は改憲阻止のアドバイス、力を得た総会記念講演「憲法を生きし平和な未来をく今『改憲』問題を考える」(小森陽一東京大学教授・九条の会事務局長)、全国の英知総会発言集。No.181は田中嘉治会長「運動70周年に拓く 70周年記念事業」。No.182「70周年記念祭典へ」と「安倍改憲発議を止める 表現の自由を奪う動きに抗する力」(高山佳奈子京大教授)。

「No.181の田中論文、『人間が人間に影響を与える手段 ①書く、②話す・言葉、③以心伝心 この3つを持ち合わせているのがうたごえ運動』。うたごえ運動を知る2冊『うたごえは生きる力』『グレート・ラブ』納得。再読」(静岡・松下由美子さん)。運動づくりの示唆を提供する本誌だが、目標読者数には届かず。運動全体が力をつけていくために、安定した発行を保証する上で、意識的な活用と読者拡大運動が急がれる。

4 学習・教育活動

学習・教育活動をすすめる、次代を担うリーダーを計画的に育てる

①運動の歴史、教育、批評、理論学習、教育学習活動

全国各地で運動70周年を記念した選曲や記念作品による音楽会、集会での様々な形態での演奏活動が旺盛に展開された。「みんなのうた」からの選曲も多く、「原爆を許すまじ」「心つなごう」「町」「母親のうた」など、うたごえ運動が果たしてきた社会的役割を語り合うと共に、新たな合唱作品として歌われた。

70周年記念事業として出版「うたごえは生きる力」を題材に、著者を招いての学習会が神奈川、静岡、奈良、大阪(急逝のため地元代理)などで持たれた。

日常活動では、客演指揮、特別講師を招いた練習会など音楽表現の追求、学習も行われている。指導者の音楽づくりの向上と合わせて、ボイストレーニング、合唱団の声づくりが大きな課題となっている。合唱発表会審査委員会や座談会では、何を表現したいか、演奏の質、選曲、作品に対する想い、歌う楽しさ、届く演奏などが語られた。また、他団体の演奏を知ることの大切さも指摘された。作品の題材となる人々、現地との交流、作品を深める努力など音楽を豊かにする活動も行われた。今日的なテーマに沿って合唱曲を委嘱、編曲も多く創られ、合唱団の成長と演奏の幅を広げている。全国合唱発表会はこれらを知る機会、互いに聴き合い、学び合うことが重要である。

うたごえ新聞では各地の演奏会の取り組み、音楽会を聴いての感想、演奏会評などが多く紹介された。また、今の時代に求められる音楽のあり様、識者の視点など興味深い記事が掲載された。合唱発表会総評、季刊「日本のうたごえ」の座談会では、うたごえ運動の創造理念、専門家としての提言等、示唆に富む内容も多い。前年度の指摘がどう生かされているかなどの視点も重要。積極的に活用し、具体的な改善点とする必要もある。

②各種全国講習会へのサークル・合唱団からの参加を強め、学びあい、次代を担うリーダーづくりを計画

全国合唱講習会は、西日本が5月4・5日、広島市で約100名、東日本は5月26・27日、東京で約90名が参加。70周年記念祭典全

国合同曲等を主な講習曲として、その音楽的な理解を深めるとともに、各講師による音楽創造の様々な可能性を学び合った。加えて、西では開催地広島ならではの選曲と被爆体験を持つ団員の話聞く貴重な内容となった。東では祭典企画に直結する講習曲として理解を深めながら、祭典への音楽創造のスタート、歌の輪を広げる場として取り組まれた。それは運動70周年の重みと新たな創造の喜びを感じる確かな一歩でもあった。合唱講習会は日頃とは異なる音楽経験、合唱づくりを、大勢が集って学び合う学びの宝庫。幅広い講師陣、新たなリーダーによる指導と継続、運動を前進させる選曲などさらに充実させたい。

全国指揮・合唱指導講習会（教育講習会）は、6月8～10日、長野・松本で74名の参加で開催。例年との日程変更もあり、参加者はやや少なかったが、内容はいつにも増して充実した。前年度のいしかわ・北陸祭典で活躍の表まりこさんの発声指導も新鮮。コース別指揮法講座は常連の受講者も多いが、個々に課題を持って参加することが重要。共通の曲で共に学び合うことは有意義で、さらに深めていく必要がある。今回は、指揮法特別講座の講師工藤俊幸氏が合唱特別講座の講師も。指揮講座の中で指摘された指揮者の仕事を、実際に合唱作りで実践されて大変好評であった。合唱の細部をこだわる意味と方法、その判断など指揮者として学ぶことも多かったが、歌い手の満足感も大きく充実した内容。日々、合唱指導に携わる指揮者、音楽リーダー、新リーダーはもとより、合唱隊としての参加者も様々な角度からの発見、成長が実感できる。さらに参加を広げ、指導者自らが求めていくことが重要。継続的な参加とより早急な成長の努力も求められている。

地域、ブロック、合唱団単位の講習会、セミナー、指揮講座等も各地で行われた。北海道では道祭典開催地の市民運動的な取り組みも視野に合唱講習会を開催、指揮法講座も継続。九州では全九州の連帯も大切に合唱講習会を毎年開催。それぞれ、地域祭典での合同演奏曲とともに70周年記念祭典全国合同参加も視野に取り組まれた。東海のうたごえ交流会も岐阜・高山で行われ、地元サークルが奮闘。東北のブロック交流会も継続。

関西合唱団は日曜講座で専門家との音楽的交流と学び合い、愛知の「まなぼ企画」はうたう会や舞台スタッフなど幅広く学びあう新鮮な取り組み。合唱研究会、指揮勉強会、団内学習会、声楽発表会など地道な勉強会も続けられた。次世代を担う新たなリーダーの入口としても有意義であり、継続的な努力が求められる。

③70周年祭典全国合同企画、「日本のうたごえ合唱団」への参加を強め、創造的連帯の前進、教育活動の交流

日本のうたごえ合唱団2018・2019は157名で結成、70周年祭典記念音楽会のオープニングで演奏。新たな委嘱作品を含む存在感のある演奏で創造の一つの到達点を示した。全国協議会の方針のもと、祭典での演奏を主な目的として自主的に参加する合唱団だが、その実践から得る経験・交流は他にはない教育的な学習の場ともなっている。委嘱作品として「彼方へ」「やさしい」「ときじくのかぐの木の实」（2018年度）「歌よはばたけ」「私たちの季節」（2019年度）を生み出し演奏。

新団員の獲得、日常的な練習での工夫、外部講師による指導の回数と内容など、合唱団独自の教育活動を知り合う、指揮者・指導者が日常の実践を報告し合い学び合うなど、具体的に交流する機会を持ち、ネットワークづくり、情報交流等を検討して音楽創造のあり方を深め合うことも求められている。うたごえ運動における創造の特徴、良さなど幅広く学習を深めていく必要がある。

5 青年のうたごえ

①サークル・合唱団・協議会で、青年・学生とつながる活動や「学びの場」を意識的に持つ

研究生制度を継続し、募集PJでうたう会などを行い、出演先や団員の友人などの繋がりに青年の入団を得ている洛北青年合唱団。その青年が全国青年交流会 in 京都の実行委員長や京都祭典の組織委員長を務め

るなど、世代継承も。若星Z☆は、ア・カペラ講座を通じ、5名入団。協議会との繋がりからの出演活動も旺盛に行った。東京青年のうたごえは祭典づくりのなかでユキヒロさんのライブの場で知り合った学生と結び、神奈川の青年とも繋がった。"Green Love Cantabile"は5周年演奏会にむけて路上ライブやカフェコンサートで団員を集め、ザ・イスカンドルは地元の集会や催し物など出演活動が増え、ハンセン病患者の詞を合唱編曲し、オリジナルコンサートに出演など創作活動も活発。関西合唱団青年部ピース&アミューズはFace bookなどSNS活動で団員を広げた。

サークル・合唱団・協議会で議論し、担当もおき、連絡会などの活動を活発化させ、さらに広い青年との繋がりを進めることも大切。

②仲間、サークルづくりへ、団体・分野を越えたネットワークづくりを強める

3・1ビギナー青年企画、Rink! Link! Zeroでは青年のうたごえとして実行委員会に参加、広島から参加して協力。8月の原水爆禁止世界大会には全国から10名の青年が参加し、「つなぐ」"H E I W A の鐘"を演奏。大阪では全国青年のうたごえ祭典inおおさかを通じて民商や教職員組合の青年、高校生と結びついた。

③全国青年のうたごえ祭典inおおさかを青年のうたごえ活性化の場とし、70周年記念につなげる

全国青年祭典には、全国から80名が参加し、70周年祭典の青年合同へのステップとなった。東京青年のうたごえがユキヒロさんとともに創作した組曲も初披露。合唱発表会には昨年と同じ21団体が参加。70周年祭典・青年合同ステージに向けて、現地・全国で練習会を重ね、仲間を増やしながら協力して進めた。初参加の青年も多く、「祭典のことを知っていればもっと多くの人に広めたかった」など感想も寄せられた。

6 サークル・合唱団・協議会づくり、ブロック連帯活動

①サークル・合唱団を新たにづくり、合唱団員をふやす活動

大阪の合唱団なかまは、地域で旺盛に演奏に出かけ、見た人が「楽しそう!」と入団、山形センター合唱団も演奏を通して団員が増えている。京都の合唱団みなみ風は、演奏会で団員を増やし、さらに京都祭典にむけて広がっている。各地で、研究生制度、演奏会に向けた特別団員、市民合唱団など粘り強い働きかけ、音楽の魅力でなど工夫して新しい団員を増やしている。

②合唱発表会参加団体、協議会加盟団体、うたごえ新聞・季刊読者を増やすことを、サークル・合唱団で討議し、目標を持ち、計画的に増やす活動

加盟は、前年を超え18団体。いしかわ・北陸祭典参加からのコールフォンス、「あしたのきみに」親子合唱団、日本のうたごえ祭典への参加から長野のコーラス桐の葉、京都のふおうえ、あ、祭典開催地の運動からななまる歌う会、東京・東部の地域協議会結成が後押しした墨田新婦人うたごえサークルかなな、野苺、協議会からのていねいな働きかけで神奈川の野ばら合唱団、協議会結成へと加盟した宮崎の宮崎県北うたごえ、うたごえサークル「たんぽぽ」。佐賀の「平和の旅へ」合唱団・さが、女声合唱団パソアパソ、県や産別の協議会に参加することと全国協に加盟することの理解の中で、愛知の福島の思いつたえ隊、青森のコーラスりんごっこ、日本のうたごえ合唱団の未加盟団員が話し合っサークル加盟を決めた長野のしなの子どもの幸せと平和を願う合唱団、同じ長野のうたごえサークルはとが再加盟、京都のSakura Cafe English Cafeユニットは、入会したい!との問い合わせから。愛知の緑高校PTAコーラスは「世話になつていたので加盟すること貢獻することも必要」と。

うたごえ2023ビジョンを据えて、加盟拡大が組織建設の幹と取り組んだ。組織活動者会議で全国の経験が交流される中、合唱発表会参加団体などに足を運んでの働きかけが加盟につながり、また、組織への理解からの加盟や、先方からの申し込みなど、多様な加盟のスタイルが生

まれている。

③加盟団体500、協議会のない県での確立をめざす活動

意識的な継続した働きかけの中で、18団体が入会。残念ながら5団体の退会。

70周年祭典を通して、東京、神奈川で加盟が進んだ。宮崎、佐賀では、協議会が結成された。山形では協議会結成への動きが続いている。

岐阜では協議会の体制が若手に引き継がれ活性化した。広島は空白の島根、鳥取のサークル建設に取り組んでいる。東北ブロックは祭典の福島ステージの取り組みなどでも連帯。関西ブロックは毎月の会議で、祭典など全国連帯の視野ももって活動。

7 事業・普及活動

①普及、教育・学習の財産としてのうたごえ出版物をみんなのものにし、魅力ある企画制作と旺盛な普及活動

1990年代に5万部を超える普及数のメーカー歌集は、ここ数年3万部に届いていない。2018年は2・5万部。労働者を取り巻く状況の変化はあるものの、使いやすく求められる歌集作りを進めると共に、職場にうたごえを広げる意義をしっかりとつかむことが求められる。

祭典ソングブック「うた・うた・うた2018」は「ポケットサイズの歌集が欲しい」「新しい歌をうたう会で取り上げたい」などの声に応え、さらに2つのフェスタの演奏曲を網羅したことで「歌って参加する祭典」活動に貢献。特に「基地・沖縄」のステージに取り組む港のうたごえはうたう会の歌唱指導と祭典ソング集の普及で祭典組織が大きく前進。祭典企画と結びついた商品として、2018スクラムコンサートライブCD「私はここに立つ」。楽譜ピース「つなぐ」。「女性のうたごえ合唱曲集」「合唱組曲燃える川より序章」などを出版・普及した。

祭典でさらにつながりを深めた東京朝鮮中高級学校のCD「ウリハッ

キョ」を出版。運動に役立つCDとして広まっている。また、サークル・合唱団の演奏活動と結んだCDとして埼玉合唱団は沖縄公演ライブCD「沖縄を歌う」を出版。

②全ての協議会加盟団体で事業活動が取り組めるよう事業担当者をおき、事業普及活動を活発に進める

事業担当者を置いて事業活動に取り組む団体はまだ少数。その中でも、担当者を先頭に目標を持って事業普及に取り組んでいる北海道合唱団や長崎のうたごえ協議会、埼玉合唱団などの経験を全国でも学びたい。これらの団体での事業普及はうたごえの普及はもちろん、それぞれの財政を支える力にもなっている。

③楽譜のネット配信などインターネットを活用、新たな層への普及の力に

音楽センターのホームページに楽譜のダウンロードサービス（有料）が開設されて10年余。出先からでもすぐに手軽に楽譜が手にはいると好評であり、さらなる周知を行い活用を広げる。また、外部サイトだが、うたごえの楽曲がダウンロードできる。コンテンツを充実させうたごえの楽曲の普及に努める。

8 郷土のうたと踊り

①東西郷土講習会を成功させる

祭典や全国和太鼓と民謡・民舞まつりの郷土合同に繋がる講習会で、専門家を講師に迎え充実を図った。西日本が5月に、東日本が6月と7月に開催した。

西は、こうべ輪太鼓センター会館で、歌舞劇団田楽座を講師に、新作の「にぎわい江戸楽」の講習、他に、琉球國祭り太鼓兵庫支部を講師に「ミルクムナリ」を、太鼓衆団輪田鼓の田中嘉治氏を講師に「花がたみ」の講習を行った。東は、国立オリンピック記念青少年総合センターで、銚子正調大漁節保存ひびき連合会を講師に「銚子の早打ち太鼓」と、エ

イサーの「仲順流り」「赤田首里殿内」「唐船どーい」が、金城吉春とその門下生の講師により行われた。7月には、府中生涯学習センターで「にぎわい江戸楽」の講習が行われ75名が参加した。

②全国の郷土活動、経験交流などの情報をうたごえ新聞に反映させる
「にぎわい江戸楽」をメインに東西講習会のレポート等のほか、連載で加藤木朗氏の「とつびんばらりのふう」。70周年祭典ヒューマンフェスタでの「にぎわい江戸楽」の全国郷土合同の115名での演奏、全国和太鼓と民謡・民舞まつり、東日本郷土部会の「江戸やつこまつり」を母体とした祭典全国合同成功への取り組み等もうたごえ新聞に反映された。

全国和太鼓と民謡・民舞まつりでは、過去の祭典郷土合同の、宮城「雀おどり」、愛知「あゆちの鼓動」、愛媛「水軍太鼓」、石川「北陸のひびき」、東京「にぎわい江戸楽」が演奏され、合唱団のコンサートや各種集会でも演奏されていることは、全国協郷土部会の開催、郷土講習会取り組みの成果として挙げられる。

③専門家・保存会との協力関係を進める

郷土講習会や70周年祭典の取り組みで専門家・保存会との協力関係が進んだ。

9 専門家及び他団体との協働

専門家及び他団体との情報交流、協力共同で音楽文化の豊かな発展をめざす

原水爆禁止日本協議会との定期的な懇談会を行い、核廃絶の世界情勢や、世界大会、ヒバクシャ国際署名などの運動について交流した。全国各地の合唱団が専門家の委嘱作品を依頼するなど、ともに音楽づくりを進めた。

祭典の音楽づくり、講習会の講師、合唱発表会の審査員などで、専門家の協力を得た。70周年祭典でのゲストのみなさんとの出会いも特筆。

「戦争法に終止符を！音楽人・団体の会」、うたごえ沖繩行動なども専門家と共に取り組みを進めた。

10 国際交流

世界の音楽家、音楽団体との国際交流の輪をさらに広げる

祭典では、華僑の合唱団と共に「紫金草物語」、朝鮮学校合唱部による「故郷の春」の国際交流のステージが持たれた。また、ゲストの Women of the Worldの演奏は音楽は国も言葉もこえることを示した。

日韓音楽交流20年にあたり、サム・トゥツ・ソリのリーダー、ジョン・フィラを迎えて祭典関連企画として音楽会が持たれ、広島、東京でのサム・トゥツ・ソリ公演にあわせて、交流20周年シンポジウムを開催。

合唱組曲「悪魔の飽食」は全国連絡会がバルト3国公演。祭典でも演奏の「鳥の歌」プロジェクトでスペインツアーが行われた。

さらに、全国協としての国際交流を豊かに進めていく検討が必要である。

うたごえ創立70周年から75周年に向かう

2019年活動方針

本年、最大の山場となる「憲法9条まもり生かす」たたかいに連帯し、うたごえのさらなる飛躍をめざす年に

私たちをとりまく情勢

ウソとごまかしだらけの安倍政権に「五つの止」運動を前進させ終止

符を打とう

〈9条改憲と大軍拡路線に反対しよう〉

今、うたごえが進めている「5つの止」（戦争法廃止、辺野古新基地建設阻止、原発停止、核兵器禁止、安倍9条改憲政権に止（とど）め）運動は昨年にも増して緊急かつ重要性を帯びてきている。

安倍政権は昨年12月、新「防衛大綱」を閣議決定した。19年度予算案における軍事費の総額は5兆2547億円で5年連続して過去最高を更新。寿命が10年程度と言われる米最新鋭ステルス戦闘機F35Bを爆買いし、護衛艦「いずも」を攻撃型空母に改修、長距離巡航ミサイルの取得など、本格的な攻撃能力を持つことで自衛隊を専守防衛から大きく変貌させようと画策している。

1月の通常国会施政方針演説で安倍首相は、「2020年新憲法施行という目標に変わりはない」と強調、同月に開かれた自民党定期大会では、統一地方選・参院選に向け、今年を「決戦の年」と位置づけ、「改憲の道筋をつける覚悟」と明記した運動方針を決議している。いうまでもなく9条改憲の狙いは、単に存在する自衛隊を憲法で追認するだけでなく、その本質は憲法違反の戦争法を合憲化し、海外での武力行使を無制限に可能にすることであり、そのための軍事力増強なのである。これまで安倍自公政権は、2013年特定秘密保護法、15年安保法制Ⅱ戦争法、17年共謀罪法など、数の力で強行採決を繰り返し、アメリカの言いなりに戦争ができる国づくりに暴走してきた。憲法9条への自衛隊明記で、これを空文化・死文化することこそがその総仕上げというべきものである。自民党は全ての小選挙区支部に改憲推進本部をつくるなど「草の根」からの改憲を企てており、私たちも全国各地での「九条の会」活動や、3000万署名をさらに広げていく全国的レベルでの奮闘が重要になってきている。

〈原発と沖縄新基地建設を阻止しよう〉

安倍首相は、「成長戦略」の目玉として進めてきた10カ国への「原発輸出」計画が総崩れになり、施政方針演説で「原発」政策について一言

もふれることができなかった。国内59基（もんじゅ・常陽含む）のうち本年1月現在稼働しているのは9基、内24基が廃炉準備中及び廃炉決定になっているが、それらの解体撤去期間が大半30〜40年程度、解体費用は14・7兆円に上ることが判明した。このように原発政策が破綻しているにも拘わらず、安倍政権は国内再稼働にはあくまで固執しており、中西経団連会長も「（再稼働は）どんどんやるべき」と発言し、「原発ゼロ」の世論を無視し、原発メーカーの利益を優先させようとしている。

安倍政権が辺野古の米軍新基地建設のために無法な土砂投入を続けていることに対する怒りも全国に広がってきている。政府は、工事区域に軟弱地盤が存在することを3年近く経つてようやく認めたものの、地盤改良で7万7千本もの杭を海に打ち込まなければならず、埋め立て承認の「設計変更」申請を沖縄県知事に行うと表明。専門家は、最深90mもの地盤改良工事の前例はなく、技術的にも極めて困難と指摘。基地建設反対のデニー知事が申請を承認するはずもなく、工事自体が重大な問題を抱えており、ここにきて基地建設は法的にも技術的にも不可能であることが鮮明になってきている。

このような中、自民党の妨害をはねのけ、全県実施を勝ち取ることができ去る2月に執行された「県民投票」では、投票総数の7割超えの43万票余を獲得、全市町村で「反対」が多数となった。

この結果は、玉城知事にとつて、その政治姿勢を強固にする大きな力になるとともに、引き続き統一地方選挙や参院選挙の勝利につなげていく力ともなるものである。「祭典」の期間中、地元、全国から多くの「沖縄うたごえ基金」が寄せられたことにも表れているように、沖縄への連帯運動は全国的にも盛り上がってきており、今こそ新基地計画の全面撤回に王手をかけるときを迎えている。

〈核兵器のない世界をめざそう〉

「ヒバクシャ国際署名」の最終的な目標は、「2020年までに世界で数億人」である。同署名連絡会は4月のNPT再検討会議準備委員会へ

の1千万以上の署名提出を呼びかけている。全国の自治体首長の「署名」への賛同は1207人（2月25日現在）に広がってきており、思想信条、党派を超えた行動も各地で生まれている。来年には5年に一度のNPT再検討会議が開かれる。この年までに禁止条約の批准を日本政府にも迫る運動と合わせて、うたごえとして年間2万5千筆の目標達成のため全国で署名活動をあらゆる機会を捉えて広げていくことが求められている。2017年7月7日、122カ国によって採択された核兵器禁止条約は、本年2月末現在、批准22カ国、調印70カ国となった。さらに昨秋の国連総会での軍縮審議では20カ国近い国が、すでに批准の手続きに入っていることを表明。いよいよ2020年被爆75年にむけ条約を力しながら「核兵器のない世界」実現の夢が現実のものとして私たちの前に迫ってきている。

〈文化も平和も守れない安倍政権に終止符を〉

毎年の初めに通常国会で首相が政治の基本方針を明らかにする「施政方針演説」。安倍晋三首相は「日本の明日を切り開く」と述べた。日本の明日を切り開くために、国政を揺るがす裁量労働制のデータ改ざん、森友問題での公文書の隠蔽と改ざん、外国人労働者の調査データのねつ造、そしてこの度の毎勤統計の不正・偽装等々、国民を欺く暴走政治を次々に重ねてきたのが安倍政権であり、実態は切り開くのではなく「日本の明日を切り刻んで」きたのである。

今年は、統一地方選挙、天皇代替わり、G20や参院選、消費税と政治日程は過密になっていて、改憲発議は困難とも言われているが決して油断はできない。安倍首相は「憲法にしっかりと『自衛隊』と明記して、違憲論争に終止符を打とう」と述べ、改憲への強い執念を露わにしている。しかし、世論は改憲を望んでおらず、直近の世論調査でも安倍首相の下での改憲に「反対」が56・7%（共同通信、2月4日付「東京」など）を占めている。

文化分野においても安倍政権は文化行政に異質の考え方を持ち込んできていて。2001年に制定、2017年に改正された文化芸術基本法

の前文に「文化芸術の礎たる表現の自由の重要性を深く認識し」という文言が新たに加えられた。しかし、安倍政権は文化を商売の具として捉え、同年閣議決定した「骨太の方針2017」では、「文化芸術・観光・産業が一体となり新たな価値を創出する『稼ぐ文化』への展開」を呼号し、そのための文化庁の機能強化だと明言した、文化予算も18年度で1077億円と少なく、抜本増額が求められている。

表現の自由が謳われる中、2014年、さいたま市の公民館で「九条俳句」不掲載問題が生じ違憲だとして掲載を求めた裁判で、昨年末、原告側の勝訴が確定、市は謝罪し掲載を発表した。全国各地で政権に「忖度」した同様の問題が起きている状況下で、公権力の不公正な取扱を違法としたこの判決は画期的な意味をもつものとなった。

2019年は文字通り「改憲阻止」最大の山場になることから、うたごえは憲法9条、13条（幸福追求権）、21条（表現の自由）、25条（生存権）の理念・精神を歌を通して実践する「歌う日本国憲法請負人」として、憲法のところを歌に託して人々の心に寄り添い、全国で共同の運動の輪を広げることが焦眉の急となっている。いまこそ災いの根源である9条改憲安倍政権を国民審判でパンドラの箱に封じ込め、二度と蓋が開かぬよう世論の力で鍵をかけよう。

以上の情勢から、70周年記念事業の成功をバネに、うたごえの理念をさらに磨き、高めることができるよう2023年、運動75周年に照準をあてた創造・普及・組織活動を推進するため2019年を以下の活動方針ですすめる。

方針（1）「安倍9条改憲阻止」最大の山場の年に、戦争法廃止、辺野古新基地建設阻止、原発停止、核兵器禁止、「安倍暴走政権に止（とどめ）」の「5つの止」のたたかいで一致する市民共闘をさらに広げ、連帯しながら憲法のところをうたごえで広めよう

①「安倍9条改憲No! 全国うたごえアクション」を全国で広げながら、3000万署名を広げる運動に連帯し、2万5千人の署名活動を全国津々浦々で進めていく。

・ヒバクシャ国際署名を3月末の全国集計に連帯し強めていく。本年度も2万5千筆の目標を決めて取り組むとともに、「19日行動」はじめ全国各地での街頭駅頭宣伝等を行うたや音楽で廃止をアピールする。

・サークル・合唱団、協議会で「戦争法に終止符を! 音楽人・団体の会」への入会、賛同金の訴え等の取り組みをすすめる。同会として、専門家とともにこれまで3回の取組みを展開してきたが、今年6月に笑いと音楽で安倍政治を斬る「落語と音楽のつどい」を開催する。

②沖縄県民投票の結果を政府は尊重し、法的にも技術的にも困難を極めている辺野古埋め立て工事を断念させるためにも「オール沖縄」のたたかいに連帯する。また、辺野古・高江での座り込み行動など、「沖縄を返せ! うたごえ大行動本部」の取組みを強化し、全国でも沖縄支援・連帯の取り組みを強める。

・オール沖縄Peace Songポケット歌集を活用し、うたう会、コンサート等機会あるごとに「沖縄を返せ! うたごえ基金」に取り組む。

・創作曲や替え歌作りで連帯し、支援の輪を広げる。

③東日本大震災被災地への支援を継続し復興・再生、原発ゼロの社会をめざす思いを歌にして広げる。

方針へ2) 人々の願いと結び、「みんなうたう会」を旺盛に展開し、平和憲法を守り生かす、共に生きる町づくり、地域づくり・職場づくりのうたごえを活発に広げる。

①「いつでも、どこでも、うたごえを」を合言葉に、合唱・器楽・和太鼓・民舞等多種多様な形態で大勢の人とともに歌う喜びの機会と場をひろげる。

・日常の演奏・創造活動を発展させ、平和で健康なうたを普及する。

・全市区町村で、多彩なうたう会活動を展開し、創りうたい広げる普及活動を旺盛に展開する。

②すべてのサークル・合唱団は旺盛な演奏普及活動を行い、75周年にむけた全市区町村での「みんなうたう会」を計画もって実践する。

③すべてのサークル・合唱団は職場にうたごえを届け、サークルづくりの計画をもって実践する。

④全国各地で平和コンサートや地域原水協とも協力共同して平和うたう会等を開催し、平和行進、世界大会につなげていく。

⑤多くの人が「こぞうたう会」愛唱歌を創り出す創作運動を活発にする。

・「みんなで作るうたう会」を広げ、新しい創り手を生み出し創作活動と作品交流を活発にする。

・全国創作講習会を誰もが参加できる内容で成功させるとともに、全国各地でも講習会を開催する。

⑥創作活動の旺盛な展開を図るとともに、機関として創作作品を蒐集(しゅうしゅう)・管理・公開する創作センターを全国協内に設置する。

方針へ3) 地方、産別、全国とも活発にし、学びあい、創造の高まりをめざす合唱発表会をつくる。

①合唱発表会を協議会活動の年間活動の柱に据え、演奏・講評を通じて交流し学び合うという発表会の原点をいっそう輝かせる。

②新しいところに積極的に呼びかけるとともに、運営に工夫を凝らし豊かな交流ができる合唱発表会をつくる。

③合唱発表会参加団体を1600団体に、未開催県の今年度開催計画を持つ。

④合唱発表会のあり方について小委員会をはじめとした検討をもつ。

方針〈4〉地方祭典の全都道府県開催をめざし、日本のうたごえ祭典の長期開催計画をもつ。

①うたごえを起こし、つながりを広げ、新たな発展をめざす「うたごえ祭典」の役割を輝かせ、地域や都道府県単位、産業別・階層別の祭典を活発にし、祭典運動の前進をめざす。

②「2019年日本のうたごえ祭典・京都」を地元、全国の連帯で成功させ、2020年の広島での日本のうたごえ祭典を準備する。

③2021年以降の開催計画を祭典プロジェクトで検討、案を持つ。

方針〈5〉運動の魅力と人間的魅力が満載されている、「うたごえ発ジャーナル」としてのうたごえ新聞をいつそう輝かせ、歌の広がりとともに読者を常に意識的に広げる。

①「読み、創り、広げる」を合言葉に、紙面の中からたくさん運動財産を学び、創造、組織、普及の力にし本年度目標達成のため新読者を2000人増やし次期総会時には過去最高の読者を迎える。

②規模の大小を問わず「うた新フォーラム」などの全国展開を計画する。

③通信活動を活発にし、全国の活動経験を学びあう。

④季刊「日本のうたごえ」は、運動づくりのテキストとしての位置づけを高め、積極的に活用し、会員の全員購読をめざす。新読者を300人増やす。

方針〈6〉演奏・創造・普及活動を旺盛に展開する中で、運動の歴史に学び、運動の理念を受けつぎ発展させる学習・教育活動をすすめ、次代を担うリーダーが育つ環境づくりを計画的にすすめる。

①運動の歴史を引き継ぎ、日常の練習や活動の中で教育活動を重視す

る。批評活動や運動の理論学習をすすめ前進への力にしてい

②うたごえ新聞、季刊「日本のうたごえ」、「うたごえは生きる力」、対談集「池辺晋一郎の夢を見てますか」などを学習・教育活動に積極的に活用する。

③各種全国講習会へのサークル・合唱団からの参加を強める。各協会やブロック等で指揮者・指導者の交流を活発にし、そのネットワークづくりをすすめる。

④サークル・合唱団・協議会の次代を担うリーダーづくりの計画をもつ。

⑤日本のうたごえ祭典の全国合同企画、「日本のうたごえ合唱団」への参加を強め、創造的連帯の前進をめざす。

方針〈7〉青年の要求に応えた音楽づくり、青年サークルづくりを積極的にすすめる、次代を担う青年を迎える。

①サークル・合唱団・協議会で、青年・学生とつながる活動や「学びの場」を意識的に持つ。

②仲間づくり、サークルづくりへ、団体・分野を越えたネットワークづくりを強める。

③「日本のうたごえ祭典企画『青年交流会in京都』」を青年のうたごえを活性化する場として位置づけ、青年を積極的に送り出し、「2019年日本のうたごえ祭典・京都」につなげる。

方針〈8〉サークル・合唱団をつくり協議会への加盟をよびかけ、うたごえ協議会の強化と建設をすすめる。空白県をなくすために、サークル加盟を積極的におしすすめる。地域ブロックの連帯活動を活発にする。

①サークル・合唱団を新しくつくり、サークル・合唱団員を増やす。

②合唱発表会参加団体や協議会加盟団体を目標を持って計画的に増やしていく。

加盟団体500団体をめざす。

③うたごえ協議会のない県の協議会確立を計画を持ってすすめる。現在2サークルある地域は、今年度中の協議会結成をめざす。

方針〈9〉うたごえ事業出版物を多くの人々に広める制作と普及、事業活動を旺盛に展開しよう。

①普及、教育・学習の財産としてのうたごえ出版物をみんなのものにし、魅力ある企画制作と旺盛な普及でうたごえの前進の力とする。

・ニューアレンジ合唱曲集「みんなのうた」、「うたごえは生きる力」、対談集「池辺晋一郎の夢を見ますか」「2019メーデー歌集」「オーラル沖繩Peace Song」など楽譜、文献、CDなどを活用し、多くの人にうたごえを届け、闘いの大きなうねりをつくる。

・みんなうたごえ、うたごえ喫茶の活性化や拡大のために、出版物の活用や普及に努める。

・サークルや合唱団の演奏活動と結んだCD、楽譜などを出版し普及する。

②全ての協議会加盟団体で事業活動が取り組めるよう事業部担当をおき、事業普及活動を活発に進める。

③楽譜のネット配信など、インターネットを活用した取り組みをすすめ、新たな層へのうたごえ普及の力にする。

方針〈10〉「郷土のうたと踊り」を旺盛に展開し、専門家との協力協同、全国講習会の充実、全国の活動の経験交流などを活発にし、まちづくりにつながる活動を計画をもって進める。

①東西郷土講習会を成功させる。

②全国の郷土活動、経験交流などを活発にし、情報をうたごえ新聞に反映させる。

③専門家・保存会との協力関係をすすめる。

方針〈11〉専門家及び他団体との情報交流、協力共同により音楽文化の豊かな発展をめざそう

①各種合唱講習会、指揮者・指導者講習会はじめ、あらゆる機会をとらえて運動内外の専門家との協力共同をはかり、うたごえの創造的力量をたかめる。

②平和・民主団体との交流、協同を強める。

方針〈12〉世界の音楽家、音楽団体との国際交流の輪をさらに広げる。とりわけ、アジア、世界への視点で75周年に向かう国際交流の輪を広げる。

おわりに

1947年に始まった核戦争の脅威を警告するため、地球滅亡の時間を午前0時として地球最後までの残り時間を象徴的に示す「終末時計」。2019年は1953年（米ソ水爆実験に成功）に続き、昨年と同じく過去最悪を維持する「残り2分」と発表された。一方、長い道を経たようやく人類史上初めて「核兵器禁止条約」が国連で採択されてから一年半が過ぎ、これまでに条約を批准した22カ国を合わせると、発効条件となる50カ国に近い将来、見通せる状況が生まれてきている。来年には50カ国以上が批准し、悲願である世界終末時計の存在自体を終わらせなくてはならない。

核兵器禁止条約づくりを主導した有志国が6カ国ある。その一つが今日、アフリカを代表する経済大国の南アフリカ共和国である。この国の

発展と民主化に貢献した人物が故ネルソン・マンデラ元アフリカ民族会議（ANC）議長である。国家反逆罪で終身刑の判決を受け、27年間に及ぶ獄中生活の後、釈放。

同国初の全人種参加選挙を経て大統領に就任した。

昨年、生誕100年を迎えたそのマンデラの言葉。「人生で最も偉大な栄光は、転ばないことではない。転ぶたびに起き上がり続けることにあ
る」。この言葉はそのまま沖繩をはじめとする「五つの止」運動に身を挺してたたかっている人々に通じる。なぜなら、悔しさを知っているから。地獄を知っているから。そして、それでも進み続ける理由を持っているからである。

今年も一年、平和への願い、生きる力への想いをうたの翼に乗せて、多くの人々に希望と勇気を届けるうたごえを全国で展開し、歴史をすすめ未来をひらく年に力を尽くそうではありませんか。

産業別&地域うたごえ祭典

教育 8/24(土) ～ 8/25(日) 青森

国鉄 9/22(日) ～ 9/23(月) 宮城

医療 9/15(日)

自治体 9/25(水)

電通 9/28(土) 京都

青年交流会 8/24(土) ～ 8/25(日) 京都

北海道祭典 9/7(土) ～ 9/8(日)

◆2019年主な日程予定

◎2019年うたごえの主な日程

日本のうたごえ祭典・京都 11/29(金) ～ 12/1(日)

東日本合唱講習会 6/29(土) ～ 6/30(日)

西日本合唱講習会 5/5(日) ～ 5/6(月)

西日本郷土講習会 5/4(土) ～ 5/5(日)

全国指揮・合唱指導講習会 6/14(金) ～ 6/16(日)

原水爆禁止世界大会 8/4(土) ～ 6(月) 広島

8/8(水) ～ 9(木) 長崎